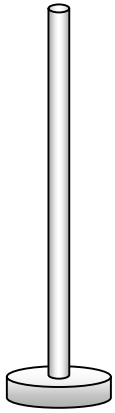


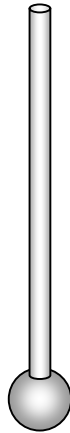
(株)レオテック社製FUDOHLレオメーター用治具 (一部)

圧縮治具



Φ3, 5, 8, 10, 15,
20, 30mm

球型押し治具



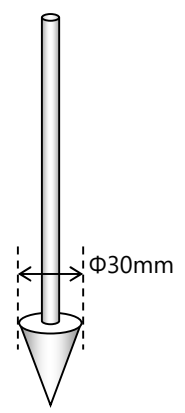
Φ3, 5, 7, 10,
15, 20, 30mm

進入度治具



Φ3, 5mm
先端角60°

円錐押し治具



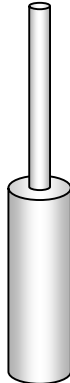
先端角度40°, 60°

円柱押し治具(1)



Φ3, 5mm

円柱押し治具(2)



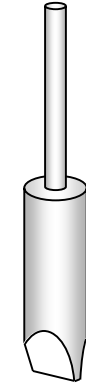
Φ10, 15, 20mm

曲面押し治具

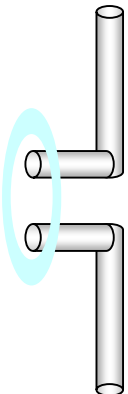


R 2.5mm

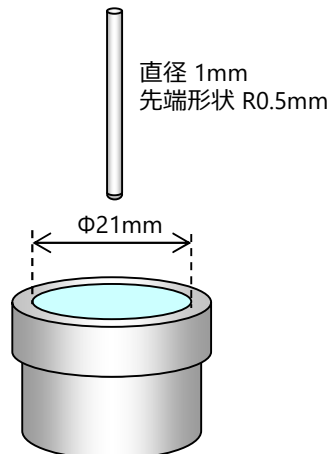
歯型押し治具



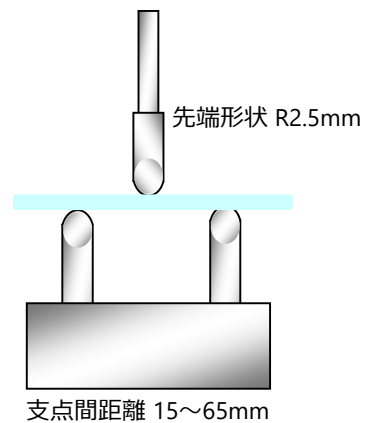
リング状試料引張



レトルトパウチ突き刺し



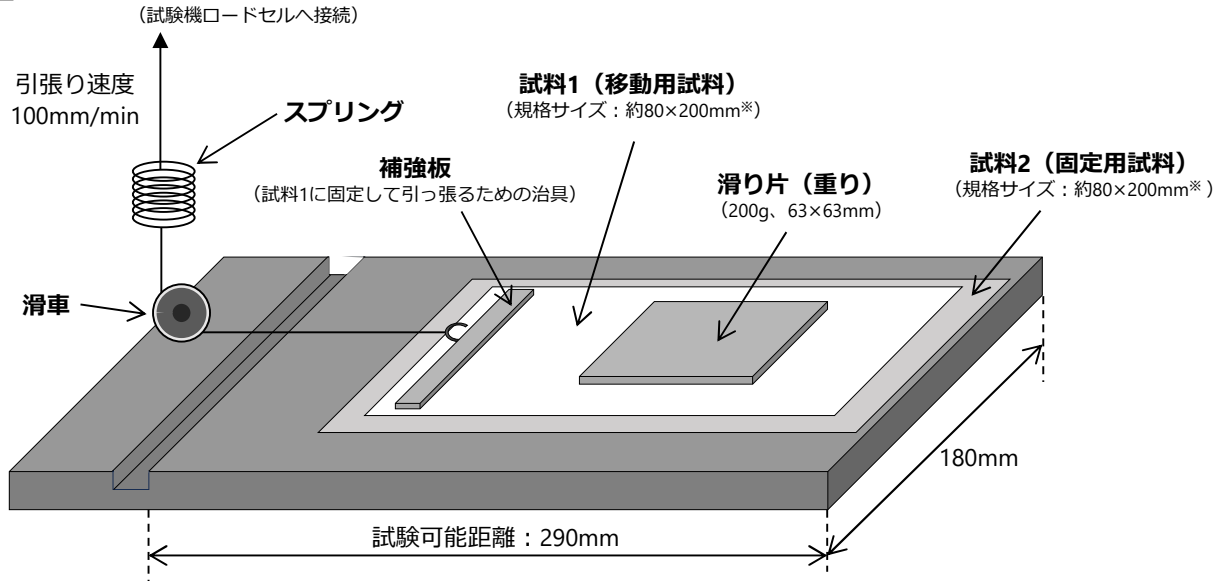
折れ試験 (3点曲げ試験)



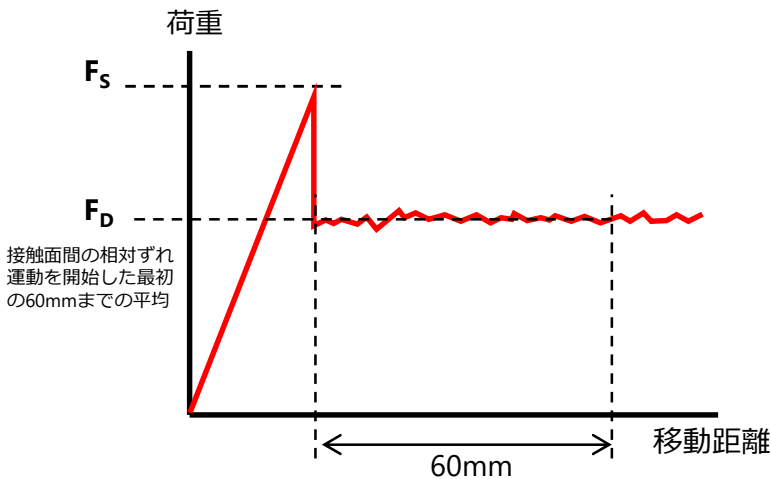
摩擦係数測定治具 (JIS K7125 フィルム及びシート 摩擦係数試験方法)

※規格に厳密に準拠しないのであれば、試料1は試料2よりも小さいものを準備した方が取り回しがよい。同様に、試料2の長手方向も200mm以上が望ましい。

治具概略図



摩擦係数計算



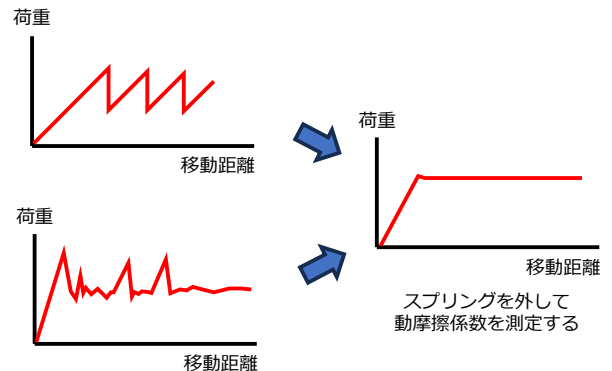
$$\text{静摩擦係数 } \mu_s = F_s / F_p$$

$$\text{動摩擦係数 } \mu_D = F_D / F_p$$

- F_s : 静摩擦力 (試験機のロードセルで検出される荷重)
- F_D : 動摩擦力 (試験機のロードセルで検出される荷重)
- F_p : 法線応力 (200g滑り片で1.96N)

摩擦力が強く、スプリングの影響で試料1が不連続な動きをする場合、静摩擦係数は測定できますものの、動摩擦係数を同時に測定することはできません。このような試料において動摩擦係数を測定するときは、スプリングを除去して動摩擦力を測定します。

静摩擦力ピークのあとで荷重が振れる場合、この部分を含めて動摩擦係数を測定することはできません。このような時は、荷重振れのある部分を除いて動摩擦力を算出するのではなく、スプリングを外すことで荷重振れを無くして測定します。

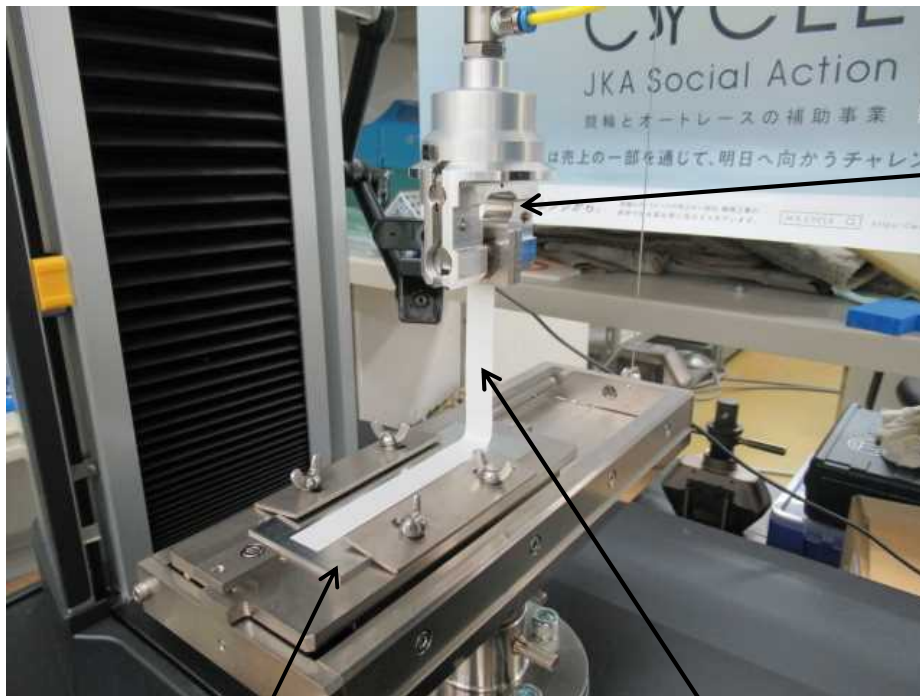


スプリングを接続して測定を実施した際、上記のような測定結果がしばしば確認されることから、当センターでは「静摩擦係数：スプリング接続あり／動摩擦係数：スプリング接続なし」で別測定として実施しています。

90°剥離試験 (JIS Z 0237 粘着テープ・粘着シート試験方法)

治具概略図

※圧着装置は重量1kgの手動式を保有しています。従って、センターで貼り付けを行う場合、JISに準拠するならば試験片幅は17mm未満となります。JISに準拠した上で幅17mm以上の試験片を試験する場合は、別途重量2kgの圧着装置をご準備ください。



上部チャック

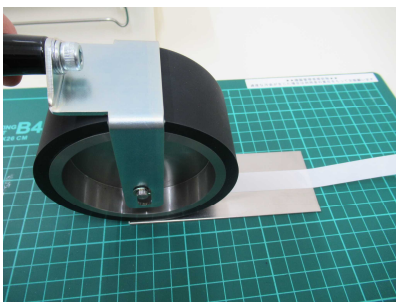
試験板

(幅: 30~50mm、長さ: 100~130mm、厚み: ~5mm)

試験片

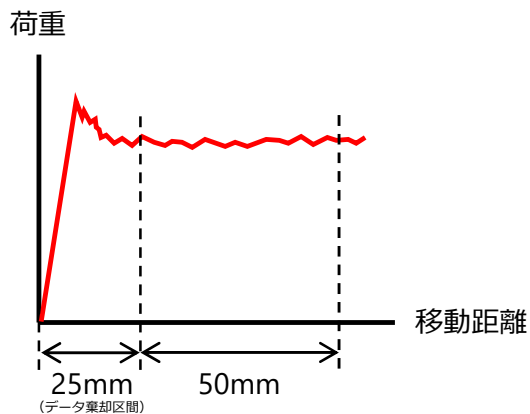
(幅: 3mm超~24mm*、長さ: 30mm)

圧着装置



- 圧着装置を用い、試験板に試験片をローラーで圧着します。
- ローラーは 10 ± 0.5 mm/sの速度で試験片上を2往復させます。
- 試験板と試験片の間に気泡が入った場合は、試料を破棄します。

粘着力計算



- 5mm/sの速度で試験を行います。
- 測定開始から25mmまでのデータは無視します。
- 開始後、25~75mmの移動距離における荷重の平均値を粘着力として採用します。
- 結果は、ニュートン毎10mm (N/10mm) で記載します。